

# 理事長就任のご挨拶に代えて

## 「子どもは未来だから」

榊原洋一 日本子ども学会理事長

「子どもは未来である」という言葉は、日本子ども学会を開設された小林登先生が提唱されたものです。今回、小林登先生の後任をお引き受けすることになり、この言葉の意味をもう一度考えてみました。

実は、この小林先生のお言葉とは対照的なスローガンがあります。

それは、かつて国際小児科学会がインドで大会を開いたときに、当時の学会長が提唱した学会スローガンです。それは「Child Now. Not For Tomorrow」というものです。いろいろな意味にとれる言葉ですが、「子どもは未来があるから尊重されるべきなのではなく、今の子どもたちが尊重されるべきなのだ」という意味であるということを知った覚えがあります。やや卑賤なたとえでいえば、「子どもたちは将来、私たちの年金を払ってくれるから大切なのではなく、今あるがままの子どもが大切なのだ」ということになります。

子どもの貧困や飢餓が日常である発展途上国の子どもたちを考えると、このインドの大会のスローガンは、よく理解できます。

小林先生の「子どもは未来である」という言葉は、

このインドのスローガンと相反するようにも聞こえます。実は私はこの2つのスローガンの乖離が、長い間気になっていました。

今回、これからの10年間の子ども学会の行き方についてチャイルドサイエンスに文章をよせるように要望されましたが、10年間という短い期間とはいえ「未来」に想いはせると、小林先生の言葉の意味するところが、ぱっと目の前に開けてみえたような気がするのです。

それは、私たち大人（過去）と子どもたち（未来）という、異なった時間軸を生きてゆく人間同士の連帯と責任を表現したのが「子どもは未来である」という言葉であるということです。

現在の子どもたちは、その存在はかけがえのないものであると言われようとも、現在社会の方針の決定責任者（stake holder）ではありません。その最大の理由は、子どもは「今」を生きているが、将来を見通すことができない、ということです。これはしかし子どもの欠点ではなく、自分の将来について悩むことなく、今を純粋に楽しむことができる、という意味で、子どものもつ特権であり、美点なのです。私たち大人は、

確かに刹那を楽しむこともできますが、自分自身の老いや病いにとどまらず、この地球の行く末まで気にせずにはいられない性（さが）を持っています。本学会の理事の松沢哲郎さんは、チンパンジーとヒトの比較から、これはたぶん人間の大人にだけ備わった能力（時間的に延長された自己の認識）であろうという鋭い洞察を述べておられます。

現在の子どもの貧困や病い、飢えは、私たち大人だけではなく、子ども自身にも理解できる状態です。しかし、未来の大人である現在の子どもたちには、未来の自分たちの姿が想像できないばかりではなく、それを防ぐために現在やるべきことを決定する権利が与えられていないのです。

子ども学会の役割は、未来の地球の stake holder である現在の子どもたちに成り代わって、今から未来をできるだけ見通し、今から子どもたちのために（=未来の世界の stake holder のために）子どもたちが生きてゆく社会や環境を変えてゆくことだと思います。

子どもより遠くを見通すことができると言っても、私たち大人一人ひとりの視野は狭く、目の前に広がる茫漠とした未来の一部しか見ることができません。多くの大人がそれぞれの視点を持ち寄り、より広いビジョンを得てゆくことが、子ども学会員の使命であると思います。

透徹した広い視点をお持ちの小林登先生に代わることは私にはできませんが、理事をはじめとする多くの会員の皆様と一緒に、視線を少し上に向けて未来を見通して行きたいと思います。



〈プロフィール〉

榊原洋一（さかきはら よういち）

医学博士。お茶の水女子大学大学院教授。日本子ども学会理事長。チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）所長。専門は小児神経学、発達神経学特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。1976年東京大学医学部卒。東京大学小児科講師を経て、現在お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授。主な著書に『オムツをしたサル』（講談社）、『集中できない子どもたち』（小学館）、『多動性障害児』（講談社+α新書）、『アスペルガー症候群と学習障害』（講談社+α新書）、『ADHDの医学』（学研）、『はじめての育児百科』（小学館）、『Dr.サカキハラのADHDの医学』（学研）、『子どもの脳の発達 臨界期・敏感期』（講談社+α新書）など。